

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 30 年 2 月 15 日現在

機関番号：31309

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2016

課題番号：26590115

研究課題名(和文)教育モデルと評価システムの構築による福祉専門職養成教育に関する総合的研究

研究課題名(英文)A Comprehensive Study on the Education and Training of Social Workers Based on the Development of an Education Model and Evaluation System

研究代表者

嘉村 藍(KAMURA, AI)

仙台白百合女子大学・人間学部・助教

研究者番号：60438570

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題では、理念系としての福祉専門職養成教育モデルを構築し、それに基づいた実習前評価システムとしてのC B TとO S C Eの開発を進めてきた。

改訂版社会福祉系モデル・コア・カリキュラムの総合的検討の一部を行った。検討の視点を明確化し、群のみ検討し、修正点を6点提案した。C B Tは、被験者数が少ないため統計的な有意性の検証と項目反応理論による問題の分析はできなかったが、「歴史や制度に関する知識」「権利と正義(自由・平等や意思決定も含む)」「実践現場におけるチームや多職種、現場の組織構造などの知識」が不足している傾向があることが分かった。O S C Eは、課題を7つ作成し、学生を対象として実施した。

研究成果の概要(英文)：In this research project, we developed an ideal model for the education and training of social workers. Based on this model, we also developed CBT (Computer-Based-Testing) and OSCE(Objective Structured Clinical Examination) as a pre-training evaluation system.

A comprehensive review of the revised model core curriculum for social welfare was partially conducted. We clarified the viewpoint of this review and examined group III. Six points of modification were proposed. In CBT, item response theory could not be applied to the analysis of test results due to the small number of subjects. But the study revealed that "knowledge on history and institution", "rights and justice (including freedom, equality, and decision-making)" and "knowledge of teams, multi-occupations, and the organization structure at worksites" tend to be deficient. We implemented OSCE for students upon creating seven tasks.

研究分野：社会福祉学

キーワード：コア・カリキュラム 福祉専門職養成教育 実習前評価 C B T O S C E 社会福祉系コア・カリキュラム ソーシャルワーク 社会福祉学

### 1. 研究開始当初の背景

医・歯学系の教育課程では学生の質保障の観点等から臨床実習前にコア・カリキュラムに基づいた共用試験を実施し、知識面(CBT)態度・技術面(OSCE)の試験を行っている。福祉専門職養成教育における実習前評価システムに関する先行研究は、これまで北海道ブロック社会福祉実習研究協議会とGeneralist Social Work研究会(仙台白百合女子大学の教員と宮城県社会福祉士会による研究会であり、以下、GSW研究会と表記)における事例のみである。

北海道ブロックでは、実習生のコンピテンスを中心概念としてCBTとOSCEを数年に渡り実施してきた蓄積があり、北星学園大学をはじめその他の養成校でもトライアルが重ねられてきた。GSW研究会においては、福祉専門職養成教育におけるコア・カリキュラム(日本社会福祉教育学校連盟試案)をベースにCBTとOSCEによる実習前評価を実施した事例研究がある。

2013年度には、「福祉専門職養成教育における臨床実習前評価のためのCBT・OSCEに関する研究会」を発足し、北海道ブロックとGSW研究会の有志研究者が集まり、福祉専門職養成教育モデルに関する検討と協議、ループリックの手法を用いた各教育項目に関する習熟度を明確化する作業、CBTとOSCE開発について検討を進めている。

### 2. 研究の目的

福祉専門職養成教育への関心は2007年社会福祉士及び介護福祉士法の改正以降、高まりを見せている。中でもコア・カリキュラム構想については、日本社会福祉教育学校連盟が長年に渡って取り組んできた実績がある。福祉専門職養成教育の次の課題として研究成果が期待されているのが、医学系専門職養成教育に導入されている臨床実習前共用試験のCBT(Computer-Based-Testing)とOSCE(Objective Structured Clinical Examination)の開発である。福祉専門職養成教育においても、学生の質保障の観点と実習前到達度の共通基盤の確立は中心的課題である。

本研究は、この課題に挑むべく、理念型としての福祉専門職養成教育モデルを構築し、それに基づいた実習前評価システムとしてのCBTとOSCEの開発を行うものである。

### 3. 研究の方法

(第1段階)福祉専門職養成教育モデルの原型の作成とブラッシュアップを行う。具体的には、卒業時の到達目標を見据え、福祉専門職養成教育におけるモデル・コア・カリキュラム及び実習前コンピテンス等の共通点・相違点を整理し、福祉専門職養成教育モデルを構築する。

(第2段階)CBTとOSCEの作成・実施・修正・データ蓄積とブラッシュアップを行う。具体

的には、CBTの問題を作成・実施し項目反応理論を用いた分析とデータの蓄積を行い、OSCEの場面を作成・実施し、運営および評価に関する課題抽出を行い、マニュアルを作成する。

(第3段階)CBT・OSCEの試行結果をもとに、福祉専門職養成教育モデルと実習前評価システムを完成させる。

### 4. 研究成果

(1)改訂版社会福祉系モデル・コア・カリキュラム(以下、コア・カリ)の総合的検討前期と後期に分けて述べる。

#### <前期>

コア・カリの総合的検討を行った結果、ポイントとして以下の点が挙げられる。生活概念と生活構造論的アプローチの必要性、生活ニーズ論的アプローチの必要性、同心円の対象構成の理解、問題群別対象認識の理解、ジェネラリスト・ソーシャルワークの位置づけといわゆるスペシャリスト養成(MSWのように特定分野に精通する専門家)との関係の検討、学部教育と大学院教育のすみわけの6項目となった。加えて2014年7月に採択された「ソーシャルワーク専門職のグローバル定義」における「中核となる任務」「原則」「知」「実践」についての記述内容もまた精緻化作業のチェックポイントになった。

課題として、コア・カリの精緻化をさらに進め、細項目と連関する知識レベル、実践レベルの記述内容についても点検・評価が必要であること、5~10年のスパンでコア・カリキュラムの更新作業が必要であること、群18項目の関係性を図式化するなど、構造的な把握の必要性があることが明らかとなった。

#### <後期>

コア・カリの群の検討作業を行った。修正案として〔A:システムの階層構造に似ている点、同心円的な対象構成について、追加した。〕〔B:モデル・アプローチを追加した。〕〔C:対象レベルについて、「精度」+「新しいニーズ」で検討した。〕〔D:GSWを位置付け、スペシャリスト養成について検討した。〕〔E:その他の修正として、価値部分が群と重複するのではないかと〕〔F:ソーシャルワーク理論発達方向性部分、重複する部分を削除するかの検討の必要性〕の6点について提案された。

残された課題として、コア・カリの群18項目は細項目までブレイクダウンすると100近い項目があり、膨大な量に上る。そのため、今回の見直しは群のみにとどまった。

#### (2)CBTの開発

2015年度、2016年度にCBTの問題を作成し、実際に社会福祉士の実習を行う学生を対象に実施し、被験者を対象にアンケートを実施した。紙幅の都合上、結果の概要の一部を

記載するにとどめ、アンケート結果は割愛する。

年度ごとに出題するコア・カリの群を分けた。2015年度は群、群、群、2016年度は群、群、群を実施した。

対象は、社会福祉士を目指す学生であり、社会福祉士の実習前・後の2~4年生とし、対象を4つに分類した。対象1を実習開始1~2か月前、対象2を実習開始約1年前の学生、対象3を実習終了後1~6か月程度の学生、対象4を卒業間際の学生とした。

2015年度の協力校は3校(述べ88名の内、対象1は41名、対象2は26名、対象3は8名、対象4は13名)、2016年度の協力校は4校(述べ61名の内、対象1は50名、対象2は7名、対象3は4名、対象4は0名)であった。

群から群までであるCBTのテスト結果を単純集計で対象別にまとめた。尚、被験者数が少ないため項目反応理論による分析は実施できなかった。

仮に合格点を各群それぞれ総得点の60%と設定して平均点を見た場合、全員の平均点が合格点に達する群はなかった。対象別では、群の対象3、対象4、群の対象4が合格点に達するものであった。

全員の正解率が60%を超えた群は、群の対象3が60.3%、対象4が64.7%。群では対象4が60.6%であった。相対的に見て、群は他の群と比べて全員の正解率と平均点が著しく低い結果となった。

以下、対象別の正解率は省略して記載する。

群 社会福祉学の項目・対象別の正解率  
群は全体的に得点率も正解率も低い。

「全員の正解率」が60%を超えた項目は、群3のうち「1.社会福祉において「歴史」を学ぶ意義の把握」の「地域福祉の歴史と他領域の関連」(63.3%)のみである。

群 社会福祉専門職の基本に関わる実践能力の項目・対象別の正解率

全体的に全員の正解率が比較的高い群であった。

「全員の正解率」が60%を超えた項目は、7つである。その内訳は、群2の「利用者の意思決定支援に関する理解」(75.0%)

群2の「社会福祉士の行動規範に関する理解」(65.9%)、群2の「意思決定能力と意思決定に関する理解」(84.1%)、群3「正義及び社会正義の概念の把握」(77.3%)、群3「反正義状況の把握」(78.4%)、群1の「人権擁護概念と擁護方法の把握」(83.5%)であった。

群 理論的・計画的なソーシャルワークの展開能力の項目対象別の正解率

「全員の正解率」が60%を超える項目は5つある。その内訳は、群1の「ソーシャルワークの実践モデル/アプローチ」

(68.2%)、群1「ソーシャルワークの一般モデル」(60.2%)、群2「対象のレベル・集団介入」(64.8%)、群2「対象レベル・地域理解」(62.5%)、群3「関連技術群の把握と実行力」(61.4%)であった。

群 多様な利用者へのソーシャルワーク展開能力の項目・対象別の正解率

「全員の正解率」が60%を超える項目は6項目ある。その内訳は、群3「ライフイベント概念と把握」(83.6%)、群3「新問題群(虐待)」(73.8%)、群3「伝統的問題群(貧困・疾病・家族関係・扶養・住宅・生活環境等々)の理解と対応法の把握」(82.0%)、群5「生活における居住環境と各環境の生活の構造の把握」(88.3%)、群1「社会福祉における対象の理解」(70.0%)、群1「対象の変遷への理解」(73.3%)であった。

群 実践環境に対応したソーシャルワーク実践能力

「全員の正解率」が60%を超える項目は5つある。その内訳は、群1「(各)実践の場の組織構造の特性(の把握)」(68.3%)

群1「ソーシャルワーク実践の場の理解と実践方法の把握」(85.2%)、群1「ソーシャルワーク実践の場の(種別の)理解と実践方法の把握」(77.0%)、群1「(各)組織構造におけるソーシャルワーカーの位置・地位と実践の特徴(の把握)」(67.2%)

群2「連携・協働・チームアプローチ・ネットワーキング概念の把握と実践方法の理解と把握」(68.3%)であった。

群 実践の中で研鑽・研究できる能力

「全員の正解率」が60%を超える項目は6項目である。その内訳は、1問目群1「情報活用に係る情報リテラシーの理解と実行力(情報源・アクセス法・情報機器媒体の活用)」(96.6%)、群1「プレゼンテーション能力」(62.5%)、群2「実践水準の概念及び実践水準の把握方法の理解」(84.1%)、群2「情報活用に係る情報リテラシーの理解と実行力(情報源・アクセス法・情報機器媒体の活用)」(76.1%)、群2「研究の理解と研究手続・手順の把握と実行力」(62.5%)、群5「情報の比較対象・検討能力」(68.2%)であった。

全員の正解率が20%以下であった項目

群：社会福祉学

・「社会福祉制度の意義に関する概念」、「国際的側面」、「社会福祉制度を生み出す仕組み・要因」、「社会福祉の歴史」、「一般理論・原理論」

群：社会福祉専門職の基本に関わる実践能力

・「権利としての意思決定に関する理解」、「社会正義の下位概念の把握・正義の下位概念

としての自由・平等に関して理解できる」  
「意思決定の前提としての『能力論』と能力支援の意味と方法」

群：理論的・計画的なソーシャルワークの展開能力

・ソーシャルワーク理論の歴史

群：多様な利用者へのソーシャルワーク展開能力

・「チームアプローチ類型」「施設・機関内での関連職種の特徴の理解」「実践の場の組織構造特性（の把握）」

### (3) OSCE の開発

各年度に新規課題を作成し、実際に対象学生に OSCE 試験を実施し、評価を行った。

学生には事前にインストラクション用紙、タイムキーパー・案内マニュアル、評価チェックリスト、課題によっては事例概要などを渡して事前準備をさせた。尚、評価をする側には、シナリオや模範解答例や評価チェックリストのほかに 2015 年度からは評価マニュアルを作成して、事前配布をした。各試験課題の概要は以下の通りである。

尚、被験者数は、2014 年度は 8 名、2015 年度は 6 名（2 大学から 3 名ずつ）、2016 年度は 4 名である。

#### 改訂版アセスメント（2014 実施）

評価項目は「アセスメント」「プレゼンテーション」の 2 つを設定し、それぞれに小項目を 5 つ設定し、各項目 3 段階で評価する課題とした。場面は、特別養護老人ホームの新人相談員が事前に作成したアセスメントをカンファレンス場面で主任生活相談員に説明する場面とした。持ち時間は 11 分として最初の 7 分でアセスメント結果をプレゼンテーションし、残りの 3 分間で質疑応答とする。

被験者 1 名に対して評価者は 2 名（教員 1 名と現場の実習指導者（以下、「現場」）1 名）とした。

試験実施時に合格点を明確に定めていなかったが、仮に 48 点満点中 25 点以上と設定し分析した。

仮の合格点を超える評価は 9 件、評価者 2 名とも評価が合格点を超える学生は 3 名であった。すべての学生の評価の平均点は 28.44 点であり、現場の評定平均は 25.86 点（最大値 32 最小値 20）、教員の評点平均は 30.44 点（最大値 39、最小値 21）であった。

#### 情報収集・調整機能（2014 実施）

コア・カリに網羅的に示されている「情報収集する力と調整する力」を中心に作成した。評価項目は「調整機能」「情報収集と事例の概要把握」「プレゼンテーション」とした。「調整機能」は、小項目を 7 つ、「情報収集と事例概要把握」は小項目を 6 項目、「プレゼンテーション」は 5 項目設定した。評価尺度は 3 段階である。

場面は、被験者が地域包括支援センターの

新人社会福祉士として、同居家族から虐待が疑われる女性入院患者について、他の医療機関に所属する MSW から電話相談を受ける場面とした。持ち時間は 13 分間で、その内の 8 分間で電話による情報収集を行い、1 分間で収集した情報をメモでまとめ、3 分間で管理者役に相談及び調整内容を報告するという流れである。尚、管理者役から質問を受ける場合もある。

被験者 1 名に対し評価者 3 名（教員 1 名、現場者 2 名）とした。

試験実施時に合格点を明確に定めていなかったが、仮に 63 点満点中の 32 点以上と設定し分析した。

仮の合格点を超える評価は 23 件、3 名の評価者すべてが合格点をつけた学生は 7 名であった。すべての学生の評価の平均点は 46.52 点、現場の評定平均は 48.13 点（最大値 57、最小値 36）、教員の評定平均は 43.3 点（最大値 54.5、最小値 29.5）であった。

基本的コミュニケーション： 群社会福祉の専門職の基本に関わる実践能力（2015 実施）

評価項目は、大きく 5 つ設定し、「身だしなみ」(2)「挨拶」(5)「説明」(9)「ラポール形成を目的としたコミュニケーション場面」(3)「全体を通して」とした（( )内は小項目数）。評価尺度は、「ラポール形成を目的としたコミュニケーション場面」と「全体を通して」は 4 段階評価とし、それ以外は 3 段階評価とした。場面は、特別養護老人ホームで実習をする実習生が、個別事例研究の対象者の方に初回の挨拶と自己紹介をし、「インテーク段階を意識し、次のアセスメント面接に向けてラポール形成を目的としたコミュニケーション能力を評価する場面」とする。場面は 2 部構成となっており、第 1 部の「面談」では、利用者の居室での面談をし、第 2 部の「面談」では相談室に戻り実習指導者と振り返りをする構成である。持ち時間は全体で 9 分とし、最初の準備に 30 秒、面談が 5 分、ベルが鳴ったら居室を退出して面談室へ移動し、残り時間で面談を行い実習指導者から 3 つの質問を受け、実習生は応答をするものである。

被験者 1 名に対して評価者は 2 名（現場 1 名、教員 1 名）である。この課題に限って評価尺度は評価項目ごとに 3 段階と 5 段階評価に分かれている。

評価尺度には、「3 合格レベル」が示したため、合格点は各項目の「合格レベル」の点数の合計 +1 点とし、90 点満点中 67 点以上を合格とした。

合格点を超える評価は 12 件中 7 件であった。評価者 2 名とも合格点と評価した学生は 2 名であった。すべての学生の評価の平均点は 67.17 点であった。評価者別にみると現場の評価者の評定平均は 70.56 点（最大値 82、最小値 47）、「教員」の評点平均 63.83 点（最

大値 82、最小値 63)であった。

問題解決アプローチ： 群理論的・計画的なソーシャルワークの展開能力(2015実施)

評価項目は、「理論的・計画的なソーシャルワークの展開能力」「プレゼンテーション全体の評価」とし、それぞれ4つの小項目で構成されている。評価尺度は6段階とした。

場面は、地域包括支援センターで実習を行っている実習生が、実習指導者が既に支援介入しているケースについて、支援計画の立案に向けた意見交換を実習指導者と実習生が行う場面であり、実習生は支援方針のうち、主に「問題解決アプローチ」を用いることに関しての意見を求めている場面である。持ち時間は10分であり、最初の30秒で入室と準備を行い、9分30秒の間に実習指導者から3つの質問に対して受け答えを行う。終了後学生は30秒程度で退出する。

被験者1名に対し評価者は2名(現場1名、教員1名)である。評価尺度は6段階で、「5優れている」「4良い(学生としてはよくできているレベル)」「3合格レベル(最低要求レベル)」「2合格境界領域」「1不合格だが改善可能」「0明らかに不合格」である。合格点は65点満点中40点以上とした。

学生と評価者別の得点で、合格点を超える評価は4件であった。1名の学生に対して評価者2名とも合格点と評価した学生は1名であった。すべての学生の評価の平均点は36.5点で、合格点に満たなかった。評価者別にみると現場の評価者の評定平均は38.67点(最大値47、最小値32)、「教員」の評定平均は34.33点(最大値47、最小値26)であった。

研究能力+関連能力： 群実践の中で研鑽・研究できる能力(2015実施)

評価項目は「実習の中で研鑽・研究できる能力」「ソーシャルワークの基本技術及び多様な介入レパートリーを有した確実な実践能力」「対象のレベルに対応したソーシャルワーク実践能力」「プレゼンテーション」とし、それぞれ3つの小項目で構成されている。コア・カリの複数の群に示された項目を評価する複合型の課題とした。

場面は、地域包括支援センターで実習をする実習生が、実習先がある地域のニーズ調査を目的として民生委員を対象に予備調査(質的調査)を行う設定である。持ち時間は17分30秒で、その内訳は30秒で入室と準備を行い、10分間で民生委員を対象にインタビューを行い、2分間で今後のさらなる調査に関する調整・交渉を行う。民生委員が退出後3分間でインタビューの要点をまとめ、2分程度で実習指導者役(評価者と兼任)に今後の調査の方向性・アイデアの提示を行い、10秒で退出をする。

被験者1名に対し評価者は2名(現場1名、教員1名)である。評価尺度は「問題解決アプローチ」と同様の6段階である。75点満点

中46点以上を合格点とした。

学生の評価者別得点では、合格点を超える評価は5件であった。評価者2名とも合格点と評価した学生は2名であった。すべての学生の平均得点は43.50点(最大値58、最小値26)であり、合格点には達しなかった。評価者別にみると「現場」の評価者の評定平均は45.00点(最大値49、最小値37)、「教員」の評定平均は42.00点(最大値58、最小値26)であった。

修正版基本的コミュニケーションコミュニケーション(2016実施)

改訂版基本的コミュニケーションは2015年度の実施の反省を踏まえて課題の時間や細かな点等を調整したものである。

場面は、修正前とほぼ同様である。時間は11分で、その内訳は30秒で入出と準備をして、面談は6分30秒、30秒で居室から相談室に移動、1分で面談をまとめ、2分で面談を行う。

評価尺度には、「3合格レベル」が示されているため、合格点は各項目の「合格レベル」の点数の合計+1点とし、90点満点中67点以上を合格とした。

学生と評価者別の得点で、合格点を超える評価は12件中7件であった。評価者2名とも合格点と評価した学生は2名であった。すべての学生の評価の平均点は67.17点であった。評価者別にみると「現場」の評価者の評定平均は70.56点(最大値82、最小値47)、「教員」の評定平均63.83点(最大値82、最小値63)であった。

マイクロ・アプローチ中心事例の総合的アセスメントとマクロ的視点に関する検討(2016実施)

ジェネラリスト・ソーシャルワークの枠組みにおいて適切なアセスメントができるか、関係機関との連携について把握できるか、個と地域の一体的支援について把握できるかを評価することを主とした課題である。場面は3つに分かれており、評価される場面は2つである。場面では、「面接における基本的な実践能力」「アセスメントにおける実践能力」、場面は、場面のまとめと場面への準備で評価項目はない。場面は「個別事例：アセスメントの妥当性とプランニング」「個と地域の一体的支援」とした。

場面の「面接における基本的な実践能力」の評価項目には2つ、「アセスメントにおける実践能力」の評価項目には5つの小項目を設定した。

場面の「個別事例：アセスメントの妥当性とプランニング」の評価項目には9つの小項目を設定した。

場面は、障害者相談支援事業所で実習をする実習生が、個別事例研究の対象者(23歳男性、軽度知的障害を持つ)を担当することになり、既に実習指導者が収集した情報等をも

とに、当該クライアントの母親の面談を行い、アセスメントからプランニングの実施を行う場面である。場面では、母親とアセスメント面接をする場面であり、入室・自己紹介とアセスメント・退出を10分で行う。場面は情報整理の場面で、場面の内容を整理しまとめ、場面に向けた準備を行う。持ち時間は10分である。場面は、アセスメント結果と支援方針に関する意見交換場面であり、実際にクライアントの母親にアセスメント結果を伝え、今後のおおよその支援方針や目標を説明し、母親が退席した後に実習指導者とマクロ的視点に関する意見交換を行う。持ち時間は10分で、母親との面談は7分間、残りの3分間で実習指導者の意見交換を行う。

被験者1名に対して評価者は2名とした(場面は、現場1名、教員1名、場面は現場2名)。評価尺度は6段階で、「5優れている」「4良い(学生としてはよくできているレベル)」「3合格レベル(最低欲求レベル)」「2合格境界領域」「1不合格だが改善可能」「0明らかに不合格」である。場面の合格点は35点満点中22点以上、場面の合格点は45点満点中28点以上とした。

場面の評価者別の得点は、合格点を超える評価は5件であった。1名の学生に対して評価者2名とも合格と評価した学生は、1名であった。学生の平均評価得点は22.63点(最大値28、最小値19)であった。評価項目別に見ると、「面接における基本的な実践力」は「自己紹介」(3.25)、「面接の趣旨、目的を伝える」(2.75)であった。アセスメントにおける実践能力は、すべての項目が合格基準の3点を超えていたが、「すでに収集された情報の確認」(3.25)、「クライアントの複雑な感情や思いを受け止め、適切に対応できた」(3.13)が比較的平均点が低かった。

場面の学生と評価者別得点は、合格点を超える評価は3件だった。1名の学生に対して2名の評価者が合格点と評価した学生は1名であった。すべての学生の評価の平均点は25.87点(最大値29、最小値23)であった。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0件)

〔学会発表〕(計 2件)

嘉村藍 池田雅子 小渡加衣 (2016)「福祉専門職養成教育における社会福祉系コア・カリキュラムをベースとした実習前評価としてのCBTとOSCEの開発」日本社会福祉教育学会 特定課題セッション

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

なし

〔その他〕

日本社会福祉教育学会 第11回大会 大会企画シンポジウム(2015)「実習『前』評価システムの検討とOSCEの試行」シンポジスト(日本社会福祉教育学会学会誌 14号 pp.111 - 141)

研究成果報告書(2017)『2014(平成24)から2016(平成28)年度科学研究費助成事業挑戦的萌芽的研究『教育モデルと評価システムの構築による福祉専門職養成教育に関する総合的研究』(研究代表:嘉村藍)

#### 6. 研究組織

##### (1)研究代表者

嘉村 藍 (KAMURA AI)  
仙台白百合女子大学 助教  
研究者番号: 60438570

##### (2)研究分担者

白川 充 (SHIRAKAWA MITSURU)

仙台白百合女子大学 教授

研究者番号: 00248692

池田 雅子 (IKEDA MASAKO)

北星学園大学 教授

研究者番号: 90222900

熊谷 健二 (KUMAGAI KENJI)

仙台白百合女子大学 教授

研究者番号: 20299770

宮本 雅央 (MIYAMOTO MASAO)

群馬医療福祉大学 講師

研究者番号: 10515753

三浦俊二 (MIURA SHUNJI) \*2015年削除

東北福祉大学 教授

研究者番号: 40173976

長谷川真理子 (HASEGAWA MARIKO) \*2016年削除

青森県立保健大学 助教

研究者番号: 40381305

##### (3)連携研究者

なし

##### (4)研究協力者

植木 祐子 (UEKI YUUKO)

藤田 恵美 (FUJITA MEGUMI)

加藤 麻美 (KATOU MAMI)

大村 亜沙美 (OOMURA ASAMI)

東海林 優 (TOUKAIRIN YUU)

藤井 美子 (FUJII YOSHIKO)

阿久澤 希望 (AKUZAWA NOZOMI)

小渡 加衣 (KOWATARI KAI)

斉藤 友香 (SAITOU YUKA)

小野寺 祐佳 (ONODERA YUKA)

大内 麗子 (OUCHI REIKO)

長谷川 武史 (HASEGAWA TAKESHI)